月日は百代の過客にして(二)

西をさむ

花衣ぬぐやまつはる紐いろいろ　　杉田久女

これを詠み終えた時、久女は、後の自分の人生を予感したのではないでしょうか。

花見から帰り、着物を脱いでいる細身で長身の、半ば全裸に近い自分の足元には、今まで纏わり付いていた紐が散らばっているのです。

決して単純な花鳥諷詠の句ではありません。寧ろ心情諷詠と言って良いでしょう。

これからの私には、どの様な人生が待ち受けているのでしょうか。私、久女として行くべき道を突き進んで往かなくては成らないと決心したのでした。

昭和十一年二月二十六日、青年将校ら約千五百名が高橋是清らを殺害した事件が起こりました。その後、軍部の政治支配が著しく強まり、言論、思想の自由は蹂躙され、枝葉末節まで統制されて行きました。何か現在に似ている様に思いませんか。七十年以上も経つと人間なんて愚かで危ういものです。

さて、その年の五月十八日、手に奇妙な物を持った、年の頃は三十を少し過ぎたと思われる一人の女が姿を消しました。

女は前日、泊まっていた待合を抜け出し、銀座は資生堂で化粧品ではなく、鎮静催眠剤カルチモンを購入して、相手の男に飲ませました。そして、女は男が眠るのを見計らって男を扼殺したばかりか、男の局部を切り取って持ち出したのでした。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

自分の男を他の女に取られたくない、自分一人の男で居て欲しいと、狂気染みた考えに取り付かれた一人の女の悲しい性が起こした事件でした。二日後、犯人は逮捕されるのですが、新聞は、その一部始終を、有る事無い事を書き立てたのでした。近頃のワイドショーや週刊誌のようにです。現在では、一週間もすると飽きられるから新しいネタを探さなくては為りませんが、当時の状況を考えると、相当長く人々の話題に上っていたと思われます。

そして、その年の秋、日野草城、吉岡禅寺洞に混じって杉田久女をも除名するという広告が「ホトトギス」に掲載されました。草城は俗流の手としてホトトギスを暗に批判し、無季俳句にも積極的に係わっていました。又、禅寺洞は、新興俳句運動の旗手として無季俳句を提唱していたのです。

この両名ともホトトギスを出発点としていますが、二人の進む道を相容れないものとして虚子が除名したのは理解出来ます。久女は、何が原因なのか今もってよく解らないと言われますが、虚子が彼女の才能に嫉妬したとしても不思議ではありません。その上、五月に起きたあの阿部定事件が関係しているのではないでしょうか。久女の虚子に取った行動は、相当な恐怖心を虚子に抱かせた筈です。

虚子ぎらひかな女嫌ひのひとへ帯

二〇一一年三月十一日、沖合に一本の大きな白波が立ち上がりました。

（次号につづく）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。